

ルイズ（♂）の前世は
空戦魔導師

崇藤仁齋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時空管理局航空戦技教導隊所属の魔導師、レクサス・T・クラウンは非常召集されたロストロギア回収任務にてロストロギアの暴走に巻き込まれ異世界へと転生してしまう。

そこは彼のいた管理世界とは違う系統の魔法が行使されるハルケギニア。

そんなハルケギニア世界の一国、トリステイン王国が公爵ヴァリエール家に待望の長男として生まれ変わったレクサス改めルイズは前世の知識と経験を用いハルケギニアの魔法に革命を起こす。

そして巻き起こる事件と陰謀と戦争とルイズの弟子たちに降り注ぐ容赦ない砲撃。

彼らは激動のハルケギニアを生き抜くことができるか。
剣と魔法の師弟ファンタジー、開幕。

目次

1	プログラグ
6	1

プロローグ

ハルケギニアの空を高速で翔る影が二つ。

かたやハルケギニアには存在しない金属で造られた飛行機械。日本が大日本帝国だった時代、帝国海軍が運用をしていたそれは零式艦上戦闘機——通称、ゼロ戦。

こなたゼロ戦と並んで空を往くはピンクプロンドの長髪をシニヨンに結び上げた美少女……にしか見えない小柄な少年のメイジ。

風竜でも追いつけない速度で空を往くゼロ戦の隣を苦もなく飛翔するメイジはゼロ戦を操る少年に念話で此度の作戦内容を再度通達する。

『では事前の打ち合わせ通り竜騎士隊の対処は才人、君に任せる。私は防空網を突破後、敵艦隊旗艦に向け砲撃。これを沈めた後、敵方の混乱に乘じ殲滅戦に移行する』

『了解、^{マスター}師匠！ 日頃の訓練の成果見せてやるぜ！』

『調子に乗って落とされるなよ。君には空戦適正がないんだ。もし落とされたら高度3000メートルから真つ逆さまだぞ』

『ああ、気をつけるって。それに、この戦いはレコン・キスタ……つと今は神聖アルビオ

ン共和国だっけか、そいつらからアルビオンを奪い返す大事な作戦の緒戦だ。油断なんか欠片もねえよ』

『それは重畳。では気張りましたまえよ少年。交信終了』

師からの忠告に気負うことなく返した少年は左手の手甲に収納された短剣を撫でる。

「頼むぜ相棒」
コルツラント

《All right. Master》

少年の声に応えを返したそれは魔導師にとつての魔法の杖。ミッドチルダ式にしては珍しい剣型のインテリジェントデバイスだ。

そんな彼らのやり取りにもう一振りの剣から抗議の声が挙がる。

「俺っちの事も忘れてくれるなよなあ、相棒！」

「おう！ お前もお前で頼りにしてるぜデルフ。でもまあ、空の戦いだから今回は単なる置物なんだけどなお前」

「ひでえー！」

彼はこれでもかつての神の左手ガンダールが担った伝説の剣。とは言え、此度の戦いは空の上。

今回の彼の番番はこれだけである。おでれえた、おでれえた。

そんな剣たちとやりとりをしている間に戦闘空域に入ったらしい。

徐々に大きくなる艦影から相手が大型艦隊なのが見て取れる。

「さて、出てきなすった」

相手の使い魔警戒網に引っかかったのだろう。敵艦から次々と竜騎士たちが空へと上がつていくのが見える。

それを強化した目で捉えた少年は乾いた唇を舌でなめる。

「悪いがお前等にはココで落ちてもらうぜ。ガンポッドスフィア、多重展開！」

《Firing ring lock open》

少年は自身の中にある魔力炉心——リンカーコアを廻し魔力を精製、ゼロ戦の周りに三基の魔力塊を現界させる。

「乱れ討つぜ！ ガンポッドスフィア・ガトリングシフト！」

《Open fire!》

発動ワードと共に機体の周りに常駐させた魔力塊から直進性の魔力弾が撃ち出された。

雨霰とまき散らされる魔弾に竜騎士たちは成す術なく撃ち落とされていく。

《Master! Check9!》

「あらよつとー！」

左翼から接近しつつ魔法を放つ竜騎士の攻撃を見事なロールで回避し、お返しとばかりに魔力弾をたたき込む。

ハルケギニアの技術レベルを大きく凌駕するゼロ戦の性能。それを意のままに操ることのできる神の左手ガンダールヴの力。そしてハルケギニアとは全く系統の異なる——戦闘に最適化されたミッドチルダ式の魔法。

軽く二十を越える数を相手にしてもモノともしない圧倒的な強さだ。

「こいつは念のために張つといた防御膜プロテクトシールドの魔法は無駄になつたなつと、ルイズの方は——」

「ノーブルバスタアアアアアアア！」

外から聞こえる声に遅れて桃色の極光が少年の視界をかすめる。

視線をそちらに移すと、メイジの杖から放たれた魔力の奔流が寸分変わらず敵艦隊旗艦の中心を射抜いたところだ。

船体がひしゃげるようにして地上に落ちかけた所で火薬庫に引火したのだろう爆発四散する敵艦隊旗艦。

「ひええ、相変わらずおつかねえ砲撃。神聖アルビオンの連中もご愁傷様つてヤツだな」
訓練時の非殺傷設定とはいえ幾度となく自分たちを打ち抜いてきた桃色の極光に少年は身震いする。

「でもまあ、先に手を出したのはあんたらなんだから覚悟しろよ。ウチのお師匠ルイズ様はそこんとこ容赦しねえぞ。もちろん俺もだけど」

そうしてその日、神聖アルビオン共和国の主力艦隊全滅の報がハルケギニアを駆けめぐった。

これを成したのはたったの二人。

トリステイン・アルビオン連合王国、特殊魔導戦技教導隊長たるルイズ・フランソワーズ・ブルアン・ド・ラ・ヴァリエールとその使い魔である平賀才人。

“マスター”の称号を持つメイジとその弟子であり、異世界からの転生者と転移者である。

1

「お、おい！ ルイズが人間を召還したぞ！」

「なあ、おい。メイジがサモン・サーヴァントで人間を召還したって聞いたことあるか？」

「いや、ないな。つてことは……」

「さすが、^{マスタ}極めし者のルイズだ！」

「コモンマジックを極め、発展させ、ついにはジェネラルマジックへと昇華させた大メイジ。彼に比肩できるメイジはオールド・オスマンと、かの烈風カリンだけじゃないか？」

「あれで俺たちと同一年ってんだからすごいよなあ」

いきなり目の前に現れた鏡に好奇心を抑えきれずそれを潜った平賀才人が目にしたのは、驚嘆の言葉と羨望の眼差しを向けられる一人の美少女だった。

守ってあげたくなる小動物のような小さな体軀に、つり目がちなながらも穏やかな雰囲気漂わせる容姿。ふわっとしたピンクブロードの長髪はシニヨンに結び上げられており彼女の凛とした美しさを引き立てている。

状況がつかめずに混乱する才人でも見惚れるほどの美しさだ。

周りの少年少女たちが同じしつらえ——おそらく制服だろう——のシャツやスラックス、スカートに黒いマントを羽織る中で、赤いリボンのついた袖無しの青い騎士服に白いシヨートパンツを纏い白いマントを羽織る彼女が心配そうに才人の側へ歩み寄ると彼へ手を差し伸べた。

「はじめまして。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。君は？」

「お、俺は才人。平賀才人です。あの、ここつてどこですか？ 何か外人さんのコスプレイベント会場にお邪魔してたりしますか？」

ルイズの手を取りながら立ち上がった才人は周りの風景を見ながらルイズに問う。

ちなみにルイズの手を握ったときの才人の感想は以下である。

「(うおおお!) 手めっちゃ小さい! しかもすごく柔らかい! 胸はかなり残念だけど、こんな綺麗な娘とお近づきになれるなんて俺ラッキー!」

「その問いに答える前に一つ君に質問したい。いいかな?」

「ひゃい!?! ななな、なんでせうか!?!」

「君の世界には魔法はある?」

心の内を読まれたかとドキツとする才人だったが幸いにして見当外れだったようだ。

それにしても、魔法ときたか。

「魔法って、いや、そんなものないですよ。マンガやゲームじゃあるまいし。あ、この集まりってひよつとして魔法使いのロールプレイアトラクションだったりします?」

そう応えた才人にルイズはふむとおとがいに手を当てると、後ろにいた中年のメイジ

——今回の使い魔召還の儀、監督役のジャン・コルベールの方を振り向いた。

「ミスター・コルベール、少し彼は混乱しているようです。ひとまずは腰を落ち着けられる所に彼を案内したいのですがよろしいですか?」

「ええ、もちろん構いませんよマスター・ヴァリエール。しかし、コントラクト・サーヴァントは行わないのですか?」

「今はまだ。どうやら彼はかなり遠方の国から召還されたようですので、まずは状況の説明が先かと」

「確かに彼の身に纏っているものは意匠も材質も我々のそれとは異なるもののようなですね」

「はい。おそらく東方にあるいくつかの国から召還された可能性が高いです」

「ならマスター・ヴァリエールにお任せするのが一番ですね。何といっても貴方は東方の魔法技術を読み解きハルケギニアの魔法に組み込むことに成功した賢人なのですから」

そう言つて送り出してくれたコルベールを後目にルイズは再度才人の手を取る。

「と、言う訳で平賀君。ひとまず君を私の家に案内しよう。詳しい説明はそこでね」

「あ、はい。それはいいんですけど移動はどうするんですか？ 一面原っぱで建物とか

見あたらないし、遠くにあるんなら車とかないとかなりしんどいんじゃない？」

「ふふふ。まあ確かに普通ならそう考えるよね。うん」

才人の言葉に微笑を返したルイズはさらに一步彼の近くに踏み込むと片腕で才人の腰を抱きしめた。

「な、ななな、なああああ!?!」

「口を閉じなよ少年。さもないと舌を噛むぞ」

いきなりの美少女からのスキンシップに才人が驚きの声を上げる。

「い、いったい何を——」

「飛ぶんだよ」

ルイズの言葉とともに才人の身体がふわりと浮く。

そして一瞬の浮遊の後、二人の身体が一気に空高くへと舞い上がった。

「と、飛んだああああ!?!」

いきなりのことに才人は落ちないようにひっしとルイズに抱きつく。

「そうそう、落ちないようにそうやって掴まってなよ。落ちてもしカバリーできるけど

君が恐怖でショック死しない保証はないからね」

「(ハハハ)、怖いこと言わないでくださいよ!」

とは言うものの心の中では――。

「ああ、それにしても身体柔らかいなあ。いい匂いもするし、俺このまま天国に連れて行かれてもいいかも)」

才人君、君は少し自重を覚えた方がいい。

そんなこんなをしている内に目的地に近づいてきたようだ。

「ほら、見えてきた」

「あ、あれって!?!」

まるで中世ヨーロッパ時代の砦を思わせる壁に囲われた五つの塔が見えてきた。

「あれこそ我がトリステイン王国の魔法教育機関、トリステイン魔法学院だ」

そうは言ったもののルイズはその魔法学院の上を素通りしてしまう。

「あれ? あそこが目的地じゃないんですか」

「言つたら。私の家に案内するって」

進行方向へ向かつて学園の敷地外の奥に一軒の邸宅が見える。

どうやらそこが目的地のようだ。

そうして地上へ降りたルイズはそのまま才人を伴つて邸宅の扉を開ける。

「お帰りなさいませ、マスター・ルイズ」

「ああ、ただいまシエスタ」

扉の先にはこれまた美少女なメイドさんが待ちかまえていた。

「彼はマスター・ヒラガ。私の客人だ」

「あ、ども。平賀才人……つと、こつち風にいえばサイト・ヒラガつていいます」

「失礼しました貴族様。私はシエスタと申します。トリステイン魔法学院のメイドですが、マスター・ルイズの卒業まではマスターのお世話を仰せつかっている者です」

「いや、別に俺は貴族じゃないし。だからもつと砕けた感じでもいいよ」

「そうなのですか？　でも家名をお持ちですし、それに貴族様でなくてもマスター・ルイズのお客様です。平民の身である私には恐れ多いことです。ご容赦ください」

腰を折って恭しく礼をするシエスタに、これもこれだと才人が思う中、ルイズはシエスタにマントを預けながら指示を出す。

「応接室に通すからシエスタはお茶の用意をお願い。お菓子は昨日焼いたクッキーがまだ余ってたはずだからそれを。あと、お茶を届けた後は部屋に近づかないように」

「かしこまりました」

「平賀君はこつちへ」

「お、おう」

そうして通された応接室で椅子に腰を降ろしたところでルイズが口を開いた。

「さて、ここままで大体この世界が君の世界とは違うと言うことを実感できたと思うのだけど。どうだい？」

「まあそりゃあ、あんなモノ体験すれば嫌でも実感しますよ。それに貴族や平民って身分差もあるようですし、ということはやっぱりココって異世界？」

「ご明察。ここはハルケギニア。君のいた第九七管理外世界——地球とは別の位相に位置するまさに異世界さ」